地方中小都市の魅力を活かすまちづくりの提案―真岡市を事例に―

研究組織：宇都宮大学教育学部家政教育専攻　教授　陣内　雄次
宇都宮大学大学院教育学研究科教科教育専攻家政教育専修　2年　和田　尚久
真岡市産業環境部商工観光課　堀之内　祐三

1．はじめに　―目　的―

わが国は超高齢化、人口減少という他の諸国が経験したことがない縮退社会になり、持続可能な地域社会を形成していくために、今まで以上に地域資源に着目したまちづくりが必要とされている。特に交流人口を惹きつける観光資源に乏しい地方中小都市では、地域にある潜在的な魅力を地域住民自らが見出し、能動的にまちづくりに関わっていくことが求められている。

本事業では、真岡市をフィールドに、地方中小都市の魅力とは何かを明らかにするとともに、地域資源を活かしたまちづくりとまちづくり学習のあり方を、調査研究に基づき提案することを目的とする。また、2012年12月に現地調査として訪れた大分県日田市大山町の検証も行う。

2．真岡市のまちづくりの現状

真岡市は、栃木県の南東部に位置する、人口81,109人（2013年2月1日現在）[1] の都市である。当市では2011年度より、観光によるまちづくりを推進する「観光ネットワーク」事業に取り組んでいる。また、その事業では、市民主体のチーム「もおか魅力発見隊」が活動を続けている。

2．1．真岡市の概要[1) 2)]

真岡市は、栃木県の南東部に位置し、東に連なる八溝山地と西に流れる鬼怒川を抱える、東京から100キロメートル圏内に属する都市である。2009年3月には二宮町と合併し、現在の形となった。真岡市の人口は81,109人（2013年2月1日現在）、面積は167.21平方キロメートルである。

真岡市は、古くから芳賀地方の政治・経済・文化の中心的役割を担い、江戸時代には真岡木綿の特産地として全国に知られていた。またかつては農業を産業の基盤とするまちであったが、現在は70社に及ぶ企業が操業する、大規模な工業団地を有するハイテク都市として発展を続けている。

2．2．真岡市の観光ネットワーク事業[3)]

真岡市では2011年度より、観光によるまちづくりを推進する「観光ネットワーク」事業に取り組んでいる。「まちの課題を解決し、市民のまちへのプライドを育む。それを観光という市外の人との交流を通して実現していく」これが観光まちづくりであり、観光ネットワークの目的でもある。この事業では市民と市役所職員が参加し、課題の抽出やビジョンづくり、アクションづくりに取り組んだ。

市民によるチーム「もおか魅力発見隊」では、真岡の情報発信や新しい魅力を発見する「情報チーム」、商品やツアーの開発・デザインを考える「企画チーム」、人づくりと場づくりを考える「人と場チーム」の3チームに分かれ、真岡を魅力的なまちにするために今後取り組んでいきたいアクションアイデアを考えた。

他方、市役所職員によるチーム「庁内ワーキング」は、市民のアイデアを実現するための支援策づくりを目的に活動している。2011年度は真岡市の課題と市役所が抱える課題について意見交換を行った。

なお「もおか魅力発見隊」「庁内ワーキング」による全体会議は2011年8月24日から行われた（**表1**）。

表１　もおか魅力発見隊の流れ

全体会議	
年月日	内容
2011.8.24	真岡の魅力・課題・希望の共有など
2011.9.2	取組の方向性の共有、検討など
2011.10.20	観光まちづくりのプランの検討など
もおか魅力発見隊	
年月日	内容
2011.11.24	説明会　３チームメンバー分けなど
2011.12.16	会議　取組アイデアを考える
2012.1.11	会議　取組アイデアの検討
2012.1.30	会議　アイデアの中間発表会
2012.3.5	会議　アイデアの意見交換
2012.3.21	会議　真岡のCI・VIづくり
2012.4.15	アイデア大発表会

注１：筆者作成
注２：CI…コーポレートアイデンティティの略
注３：VI…ビジュアルアイデンティティの略
引用文献：studio-L「平成23年度 真岡市観光ネットワーク事業報告書別冊 MOKA ACTION IDEA BOOK」真岡市観光ネットワーク協議会、2012、pp82-83

２．３．小　括

もおか魅力発見隊の参加者には市民だけでなく、真岡で働いている人、真岡に店を持つ人、市役所職員などもみられた。なお年齢層は20～40代と比較的若い年代の人が多かった。

もおか魅力発見隊では、2011年12月から翌年の３月にわたって計５回、３チームのメンバーが真岡公民館に集まり、今後取り組んでいきたいアイデアを考えたり、ワークショップを行ってきた。ワークショップ以外にもアイスブレークなどを行い、メンバー同士で親交を深めてきた。また、発見隊が考えてきたアイデアを他の市民に紹介する「アイデア大発表会」に向けて、５会議以外の日にも各チームでメンバーが集まり、アイデアの議論や発表会の練習が行われた。発表会で提案したアイデアは**表２**のとおりである。

表２　アクションアイデア

真岡ポータルインフォメーション	1115プロジェクト
MOKAまちデザインセンター	もおかOilway
魅力発見隊はじめました。	いちごサミット
もおかいちごのくに構想	いちごいちえ
真岡フィルムコミッション	モオカレッジ
伝統行事ホームステイ	モニャック！
真岡戦士コットベリー	時の不動産
観光コンシェルジュ	DIYツアー
リビングマーケット	コメノハナ
パパップママップ	木綿生活

注：筆者作成
引用文献：studio-L「平成23年度 真岡市観光ネットワーク事業報告書別冊 MOKA ACTION IDEA BOOK」真岡市観光ネットワーク協議会、2012、p22-71

発表会以後も、アイデアを実現させていくための話し合いが行われてきた。またそれと並行に、都心の住民が参加者となる「モニターツアー」づくりが開始され、2013年２月現在で２案のツアーが実現した。

３．先進事例　―日田市大山町―

大山町は大分県の西部に位置する山間の町である。2005年から日田市に編入された。当町ではＮＰＣ運動によりまちづくりが展開されており、現在ではウメやエノキダケなどの栽培がさかんに行われている。

2012年12月５～７日、現地調査として日田市を訪ねた。６日、大山町ではおもに４カ所を訪問し、うち３カ所で現地の人に話を伺った。また７日は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている、日田市豆田町界隈を踏査した。

３．１．大山町の概要とまちづくり

３．１．１．大山町の概要[4)]

大山町は大分県の西部に位置し、福岡県、熊本県の県境にある、山間の小さな町（1960年代初めころは村）である。2005年３月、平成の大合併の中で、中津江村などとともに日田市に編入されることになった。

2000年の国勢調査の結果によると、大山町の人口は3,910人、うち65歳以上は1,063人となっている。また産業構造は第１次産業が32パーセント、

第２次産業が26パーセント、第３次産業が42パーセントである。第１次産業の中では、農産物（野菜、果実、花卉）が11億2,500万円でほとんどを占め、畜産業は100万円しか記録されていない。

３．１．２．ＮＰＣ運動によるまちづくり[5)]

1961年、当時の村長（1982年現在大山町農業協同組合長）の矢幡治美氏は「米を作っても、若者が村に残って生活できる保障はない。しかし収益を上げる産業があるならば、農村でも文化的生活が楽しめるはずである。それには軽作業でかつ収益の高いウメやクリを栽培することが必要である」と第１次NPC（New Plum and Chestnut）運動を始めた。これは「ウメクリ植えてハワイへ行こう」を目的としたものであり、ウメ9,000本、クリ7,500本が植えられた。この運動は治美氏の強力な指導により成功した。さらにハワイへの海外旅行者も増え、人々の所得は向上した。

しかし過疎化は依然として進み、さらに農村生活に心の潤いが欠けていった。そこで1965年に第２次ＮＰＣ（Neo Personality Combination）運動を始めた。これは「豊かな心・教養・知識を持つ人づくり」を目的としたものである。この運動の中心となった人物が治美氏の長男である矢幡欣治氏である。彼は弟の書いた、イスラエルのキブツ（集団農場）視察に関するレポートを見て心を動かされた。そして村の若者たちを説き、キブツへの２ヶ月間の体験学習を始めたのである。
そしてその過程の中、1970年に第３次ＮＰＣ（New Paradise Community）運動、いわゆる住民生活の条件整備運動が始まった。

３．１．３．果樹栽培のはじまり[6)]

村や農業協同組合は1961年、軽労働で収入が多く、収穫期以外の余剰労働力を他に振り分けることができるウメやクリの栽培に踏み切った。そして総額二千余万円の助成金を出し、苗木購入の補助を行った。さらに植栽地にする原野開墾などを進め、65年には85ヘクタールのウメ園、200ヘクタールのクリ園が完成した。

66年には、クリは100トンの収穫で1,500万円の収入。67年には、ウメは500人の生産者で50トンの出荷、約1,000万円の収入、クリは465人の生産者。そして農家の16人がハワイへ観光旅行に出かけた。

しかし69年になると、約３分の１のクリの木が枯れ、ウメも不作で９割の減産となった。さらに72年にはウメはほぼ壊滅状態となり、翌年も不作となった。こうした２年続けてのウメの不作もあり、農協では第３の特産品を手掛けることになり、スモモや巨峰ブドウの模索を開始した。他方クリについては76、77年と豊作が続くが、79年には害虫が異常発生し、翌年にかけて大幅減産となっている。

1990年過ぎにはウメとスモモが主力作物となっている。92年にはウメ、スモモの「増産所得倍増大会」に生産者ら200人が参加し、ウメ３億円、スモモ２億2,000万円の売り上げを目指すこととなった。

３．１．４．キノコ、ハーブへの進出[7)]

今日の大山町の中心作物であるエノキダケは1973年に、ナメコは83年に栽培の模索が開始された。エノキダケはウメ、クリに代わる中心作物に成長し、93年には販売額が12億円となり、ナメコの生産も２億円を突破した。さらに同年にはシイタケの栽培が開始され、後にシイタケはナメコを抜いて２番目に生産の多いキノコとなる。

他方クレソンについては1980年から生産を始め、96年には生産額が１億円を突破する。またハーブについては82年から生産を始め、97年には売り上げが１億5,000万円となった。

３．２．大山町の現地調査

３．２．１．現地調査の目的

地方都市のまちづくりに成功した先進事例の１つとして大分県日田市大山町があることを知り、そこではどのような魅力・人が関わりまちづくり

がなされているのかを明らかにするため、2012年12月５～７日、現地を訪ねた。

３．２．２．現地調査における主な訪問先

日田市の主な訪問先は以下の５か所である（**表３**）。

表３　日田市の訪問先

調査年月日	地域	訪問先
2012.12.6	大山町	大山公民館
		木の花ガルテン
		大山キノコセンター
		豊後・大山ひびきの郷
2012.12.7	豆田町	豆田町界隈

注：筆者作成

⑴　大山公民館

まず大山公民館では、館長であるワトソン・ロバート氏に話を伺った。

⑵　木の花ガルテン[8]（**写真１**）

1990年、大山町農業協同組合は、アンテナショップとして直販店「木の花ガルテン」を開店した。92年から翌年にかけては、木の花ガルテンの２、３店目を福岡市に開店し、朝採れた野菜を中心に、加工品も含めた販売の増加を図っていった。木の花ガルテンはさらに順調な伸びをみせ、2001年には、大山町の店を拡大したり、農家の主婦が作った料理を味わえるレストランを開設している。2007年現在、大山町のほか、福岡に２店、大分に２店、別府に１店を構えており、年間190万人の来訪者、2003年度で13億6,000万円の売り上げがある。

写真１　木の花ガルテン（レストラン）
注：2012年12月６日筆者撮影

⑶　大山キノコセンター（**写真２**）

有限会社大山キノコセンターでは、代表取締役会長である矢幡欣治氏（３．１．２．参照）に話を伺った。

写真２　大山キノコセンター
注：2012念12月６日筆者撮影

⑷　豊後・大山ひびきの郷[9][10]（**写真３**）

豊後・大山ひびきの郷では、「株式会社おおやま夢工房」専務取締役総支配人である緒方英雄氏に話を伺った。

2002年、ひびきの郷は滞在型産業観光施設として開業した。ここには宿泊施設のほか、温泉施設、

写真３　豊後・大山ひびきの郷
注：2012年12月７日筆者撮影

体験工房、レストラン、ウメを原料としたリキュールの製造工場が整備されている。

⑸　豆田町界隈[11]（写真４）

最終日は日田市の豆田町界隈を踏査した。

1601年、豆田町は丸山城を築く際に城下町として、小川光氏により建設された。江戸時代初期には幕府の直轄地である天領となり、九州の経済・文化の中心として栄えた。なお碁盤目状の町並みには旧家や資料館が建ち並び、近世後期の町人・商人町の面影を色濃く残している。そのため豆田町は2004年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

写真４　豆田町界隈
注：2012年12月７日筆者撮影

３．２．３．現地調査の流れ

３日間の日程の詳細は以下のとおりである。

⑴　2012年12月５日（表４）

表４　12月５日の日程

時間	内容
11:30	羽田空港（東京都大田区）到着
12:30	飛行機・羽田空港発
14:30	飛行機・福岡空港（福岡県福岡市）着
15:30	高速バス・福岡空港発
17:00	高速バス・ 日田バスターミナル（大分県日田市）着 案内人の伊藤利光氏に会う
20:00～	日田市内のホテルに宿泊

注：筆者作成

⑵　2012年12月６日（表５）

表５　12月６日の日程

時間	内容
9:30	伊藤氏とホテルで待ち合わせ
10:00～	「大山公民館」到着 ワトソン氏との対談
12:00～	「木の花ガルテン」見学・昼食
14:00～	「大山キノコセンター」到着 矢幡氏との対談
16:30～	「豊後・大山ひびきの郷」到着 緒方氏との対談
19:00～	「ひびきの郷」宿泊

注：筆者作成

⑶　2012年12月７日（表６）

表６　12月７日の日程

時間	内容
9:30	「ひびきの郷」出発
10:00～	豆田町の散策
13:30	高速バス・日田バスターミナル発
15:00	高速バス・福岡空港着
17:00	飛行機・福岡空港発
19:00	飛行機・羽田空港着

注：筆者作成

３．３．小　括

つぎの２点は、大山町のまちづくりにおいて大きな特徴であるといえよう。

まず「明確な目標と強力な指導により、町の人たちを巻き込む」といった点である。大山町では矢幡親子から町の人たちへの働きかけにより、ウメやクリの栽培が開始されたり、キブツへの体験学習が実現している。またＮＰＣ運動においては「ハワイへ行く」「豊かな心・教養・知識を持つ人づくりを目指す」などといった目標が掲げられ、町の人たちにも大きな影響を与えたといえるだろう。

そして「地形の性質をきちんと見極め、それに見合った魅力を作り出す」といった点である。大山町では1960年代頃から山間という地域において、果樹や野菜の栽培が開始され、特にウメやエノキ

ダケは当町の主力作物にまで発展しているといえよう。豆田町では「建造物や町並みといった魅力を残し伝えていく」といった性質が見られた反面、大山町では約50年という歴史の中で「農産物といった、地元の地形に見合った魅力を生み出す」といった性質がみられた。

4．まとめ　－提案－

4．1．地方中小都市の魅力の検討

地方中小都市の魅力に焦点を当てた場合、それは「誰にとっての魅力であるのか」を考えることは非常に重要である。ここでは「住民（その都市に住んでいる人）」と「住民でない人（その都市に住んでいない人）」に分けて考えてみる。

まず「住民」にとって地方中小都市の魅力に関しては、「住みよい、住みやすい」という視点が最も重要な条件であるといえるだろう。たとえば「物価が安い」「自然環境に恵まれている」「社会保障が充実している」などは、住民にとって「魅力である」と感じる要因になりうると考えられる。

一方「住民でない人」に関しては、観光客や企業家など目的によって魅力の捉え方は様々であるが、観光や余暇という面で考えた場合、「日常で馴染みのないもの（事）、そこに行かないと味わえないもの（事）」という視点は最も重要な条件であるといえるだろう。たとえば「○○の観光名所がある」「○○のイベントを楽しめる」「○○の食べ物が美味しい」などは、住民でない人にとって「魅力である」と感じる要因になりうると考えられる。

4．2．魅力を活かしたまちづくりのあり方の検討

魅力を活かしたまちづくりにおいて、住民の「住みよさ」を改めて見直すことは非常に重要であるといえるだろう。住民でない人や観光客にとって、心理的に惹きつけられるものとは、日常では普段馴染みのない文化・景観・産物であったり、その都市に行かないと味わえない食・体験・おもてなしであると考えられる。このような魅力を知ってもらううえで、①住民の「住みよさ」を改めて見直す、②住民の気持ちや日常生活に余裕をもたせる、③住民が地域の特性を発見・認識し楽しく前向きにまちおこしに取り組める環境をつくる、こういった一連の流れを確立していくことがまず重要である。まちづくりは、まず住民が地元を誇りに思うことから始まり、その土台として住民の「住みよさ」があることは確かである。

4．3．魅力を学び活かす「まちづくり学習プログラム」の提案

最後にまちづくり学習であるが、4．2．③で述べたように、まずは住民それぞれがその都市の特性や利点、悪い点などを考えて見つけ出し、きちんと認識していくことが重要である。その際は楽しくかつ前向きにまちづくりに取り組める環境をつくることが必要である。たとえば、もおか魅力発見隊では、ワークショップだけでなくアイスブレークなどを取り入れて、参加者の緊張をほぐす場面が見られた。また議論の場となる部屋選びも重要であり、発見隊では公民館の和室を会場にすることで、参加者が落ち着いてくつろぎながら、まちづくりに取り組むことができた。

さらに住んでいる都市を認識するうえで市外の地域にも目を向け、実際に足を運んでみることも必要である。3．1．2．で述べたように、実際大山町でも町の人たちがイスラエルのキブツへ体験学習に行き、農業の技術を学んでいる。住んでいる都市と市外の地域を比較検証することも、都市を認識するうえで不可欠な要素といえるだろう。

住民が地域の特性や良さを認識したのちは、次の段階として、それを魅力として住民でない人たちに発信していくことが重要である。その際、都市の魅力をどう情報発信していくか、まちづくり学習を通じてきちんと検証していくことが必要と考えられる。住民でない人に①行きたい・行ってみたいと感じてもらう、②足を運んでもらう、③また行ってみたいと感じてもらう、④まちづくりに参加してアイデアを出してもらう、こういった

一連の流れを確立していくことが、まちづくり学習の最大の目的であるといえるのではないだろうか。

「住民が都市の特性を認識し明確にする」「住民でない人への情報発信のありかたをきちんと検証する」これらを基盤としたまちづくり学習プログラムを提案することが今後の課題である。

謝辞：本事業では、本学教育学部・大学院教育学研究科家政教育専修２年の和田尚久氏に協力いただいた。真岡市でのアクションリサーチ、日田市の現地調査は和田氏によるものである。また本文中の「筆者」は和田氏のことである。本事業は和田氏の協力無くして遂行することはできませんでした。ここに感謝の意を表します。

引用ＵＲＬ・文献

１）真岡市『統計情報－真岡市ホームページ』（2013年２月８日情報取得）
http://www.city.moka.tochigi.jp/11,4129,45,296.html

２）真岡市『市の概要 - 真岡市ホームページ』（2013年２月８日情報取得）
http://www.city.moka.tochigi.jp/11,0,45,370.html

３）studio-Ｌ「平成23年度 真岡市観光ネットワーク事業報告書別冊 MOKA ACTION IDEA BOOK」真岡市観光ネットワーク協議会、2012、ｐ６、20、78

４）山神進「一村一品運動の原点－大山町の米作から果樹栽培、きのこの栽培への転換の軌跡－」『政策科学』14－３、2007、p152

５）平松守彦「一村一品のすすめ」ぎょうせい、1982、pp44-47

６）山神進「一村一品運動の原点－大山町の米作から果樹栽培、きのこの栽培への転換の軌跡－」『政策科学』14－３、2007、pp153－154

７）山神進「一村一品運動の原点－大山町の米作から果樹栽培、きのこの栽培への転換の軌跡－」『政策科学』14－３、2007、p155

８）山神進「一村一品運動の原点―大山町の米作から果樹栽培、きのこの栽培への転換の軌跡―」『政策科学』14－３、2007、p156

９）緒方英雄「むらの暮らしをカタチに！ 田舎企業のブランドづくり」『国際文化研修2008春』(59)、2008、p48

10）豊後・大山ひびきの郷「心と心がひびき合う環境づくりにむけて」『新しいＣＩ［コミュニティ・アイデンティティ］の確立を目指して』株式会社おおやま夢工房

11）大分県日田市観光振興課「ひた新発見２　日田そぞろ歩き」『おおいた　日田新発見　マガジン　天領ひたへ行こう！』(1)、2005.12、ｐ７